

AKITA Biz Forest

あきたBizフォレスト TOPインタビュー

TOP INTERVIEW

秋田朝日放送株式会社

代表取締役社長 **森田 良平 氏**

1958(昭和33)年8月4日兵庫県西宮市生まれ。1982(昭和57)年神戸大学理学部卒業。1984(昭和59)年4月株式会社朝日新聞社入社(横浜支局)。2017(平成29)年6月長野朝日放送株式会社取締役。2020(令和2)年より秋田朝日放送株式会社代表取締役社長となる。



時代は変わっても、人脈づくりは大切

工藤 本日はどうぞよろしくお願ひいたします。まずは森田社長の生い立ちやご経歴をお伺いできますでしょうか？

森田 生まれは兵庫県西宮市で、甲子園球場まで自転車で15分位のところ。ずっと阪神ファンです。小さい頃から甲子園球場は慣れ親しんだ場所で、高校野球もよく見に行きました。中学高校時代からはフォークソングやロックが好きでギターを弾いたりしていました。大学は地元の神戸大学で、理系の物理学学科でした。

工藤 理系の学部から朝日新聞へ？

森田 いえ、実は大学を出て2年間は高校で物理の教師をしました。教師も楽しかったのですが、学生の頃から漠然と新聞記者になりたいという思いがあり、1984(昭和59)年に朝日新聞へ入社し新聞記者になりました。それから2017(平成29)年に長野朝日放送に行くまで33年間は新聞社で仕事をしていました。

工藤 新聞社時代の思い出などがあればお聞かせください。

森田 転職動機の根底は、色々な人と会い色々なことを吸収したいと思っていたことかと思ひます。まさにそういう仕事でした。しかし「抜いた・抜かれた」という毎日は、今思ひくと、激しい競争社会でもありました。社内はもちろん、他社との競争は特に激烈でした。もちろん発表された情報を広く伝播するというのも新聞社の重要な任務なのですが、公式発表を記事にするだけでは、基本的にどこの記事も大差はありません。他社との差別性は、いかに発表され

る前に独自で取材をして、他社に先んじて記事を書けるかというのが存在価値を高めることに繋がります。まずは情報源を作らないといけないし、もっと言えば、それを自分だけに教えてもらえる人を作ることが必要になります。メディアの世界で働く上で一番大事なのは人間関係、いわゆる人脈づくりが大切だと思ひます。

工藤 フェイクニュースなども飛び交う時代ですから、正しい情報も価値のような気もしますが、どこでも拾える情報では価値は小さくなってしまふも否めませんね。でも、どんな仕事においても希少な情報が入ってくる状態をつくるのは改めて重要なことだと思ひました。ちなみにテレビの分野にはいつごろから？

森田 1990年代くらいはほとんど社会部の記者で過ごしました。その後、様々な業務を経験し、2017(平成29)年に長野朝日放送へ異動し、2020(令和2)年から秋田朝日放送代表取締役社長になりました。

同じ報道分野でも新聞社とテレビは、ツール、情報の伝え方、発信の仕方など、とにかく全然違うものという印象がありました。長野朝日放送も秋田朝日放送もローカル局なので、朝日新聞社と比較すると組織がとてもコンパクトなので、皆が同じ方向を向いて仕事ができる感じは新鮮でした。

工藤 現在の自社の課題感などはいかがでしょう？

森田 一言でいえば「テレビ離れ」への対策で

す。特にスマホの出現により、若い人だけでなく中高年も含め、テレビを視聴する時間は加速度的に少なくなっています。それが直接テレビビジネスの頭打ちに繋がっていると言えます。産業構造的にほとんどのローカル局がCM収入に頼っている部分が大きいので、テレビを見てももらえないと、当然媒体価値が下がっていきます。それゆえにテレビ離れが我々に与える影響は深刻です。

一方で、弊社は2023年度、おかげさまで何とか増収増益で決算を終えることができました。厳しい中で社員が売上や利益を伸ばし、よく頑張ってくれた成果だと思ひます。視聴率も今年の初め頃から結構上向きになってきています。特に夕方のトレタテというニュース番組の視聴率が今年の始めから上昇し、いい傾向になっていると思ひます。社内が活気づいていく感じがあります。ただもちろん安心している状況ではなく、やはりテレビ業界、特にローカル局が厳しい現状にあるというのは間違いありません。だからこそ従来のテレビビジネス以外の事業構築は絶対的な必要要素で、とりわけ新規ビジネスの構築については、相応のスピード感をもってやっていかなければならないと思ひます。収入構造を変えていかなければ、将来への危惧が払しょくできません。難しいのは承知の上で新規ビジネス分野にどんどん踏み込んで、新しい仕掛けを作っていかなければなりません。テレビの強みのひとつとしては、自分たちが企画する事業を自分たち自身の

あきたBIZフォレストTOPインタビューは、秋田の起業家と企業環境を応援することを宣言いただいた100名以上の経営者の皆様を中心に、起業家に役立つ話題と起業家へのメッセージを対談形式でまとめたものです。

メディアで発信できる点にもあると思ひます。ネット配信などのデジタル系の仕事の他に、美術展、コンサートなどの事業なども行っています。イベント会社などが企画したのではなく、こちらが企画元になって全国に買っていくという取り組みも行っています。手間はかかりますが、自分たちで企画・主催、全国で展示展覧してもらえるような仕掛けはもっとやりたいと思ひています。自社の強みである「企画×発信」を効果的に活かしていきたいと思ひています。

工藤 ありがとうございます。森田社長がお考えになる当地秋田における経済環境の可能性やポテンシャルについてお聞かせください。

森田 子育て環境の良さは秋田の魅力の一つだと思ひます。自然も豊かですし、子供たちの学力も高いですし、他県に誇れるような素晴らしい大学もあります。

一方で、その環境で育った子供たちが秋田に戻って来たいと思えるような魅力的な就職先が乏しいというのは課題だと思ひます。せっかく全国から集まった大学生たちのほとんどが卒業後は秋田に残らない。また首都圏の大学へ進んだ人たちが、卒業後、秋田に戻ってこない。自分の力を存分に発揮できそうな魅力的な会社の絶対数が少ないのだろうと思ひます。裏を返せば、そこにはチャンスもあります。例えば秋田に居ながらワールドワイドな舞台で活躍できそうな就職先があれば変化があるのかもしれないですね。

工藤 多くの人材が県外に出してしまうのが現状ですが、自分で魅力的な企業を作った方が早いと思ひます。起業する若者も最近徐々に増えています。

森田 ですよ。それも選択肢だと思ひます。そういった起業家への期待感があります。若い

人ならではの新しい発想、従来ずっと地元で地に足をつけてやってきたのとは異なる新しい発想。地縁や血縁などのしがらみもないところから出てくる新しい発想、色々な軋轢なども出てくるかもしれないですが、むしろそのエネルギーをパワーに変えて行くぐらいの新しい発想に挑戦できる起業家がたくさん秋田に生まれることを期待したいです。最後は人の存在が何より大切だと思ひます。

猫に癒される日常

現在は4歳半のベンガル(猫)と二人暮らしだという森田社長。不在時は最新式のスマホ連動アイテムを駆使してお世話をしているらしい。犬とはまた違う、猫との微妙な距離感を日々楽しまれており、その存在に癒されていらっしやるとのことでした。

本日は貴重なお時間とお話を本当に有難う御財増した。

インタビュー

合同会社ジェグルス(共同事業体ジェイワン)アントレプレナーコンシェルジュ **工藤 実**

ライター J-MOTHERS 藤田 幸

企画 共同事業体ジェイワン(秋田市ビジネススタートアップ支援事業)

